

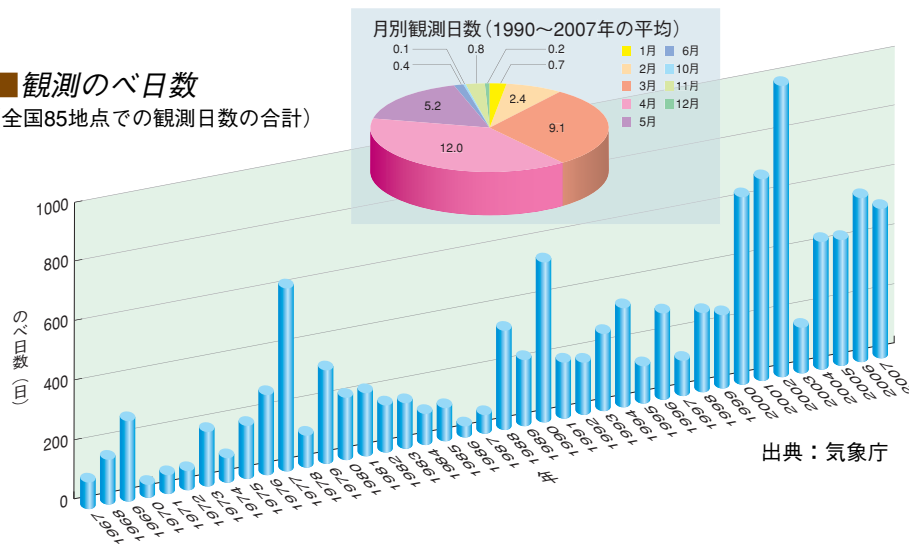
黄砂の飛来状況・被害状況

黄砂は古くから知られる気象現象でしたが、近年その頻度と被害が拡大しています。

黄砂の発生頻度

観測のべ日数

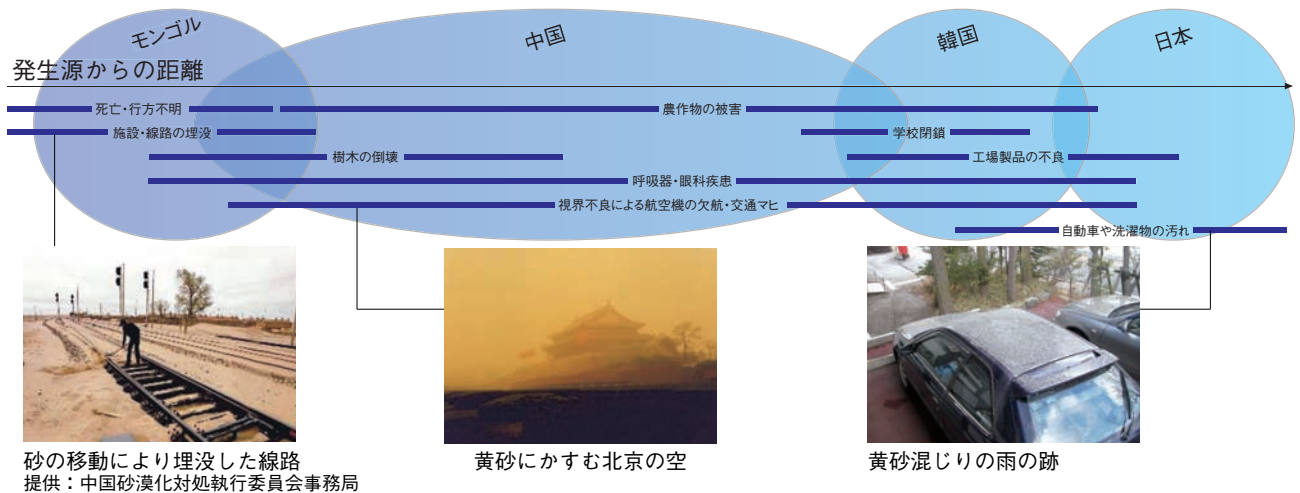
(全国85地点での観測日数の合計)



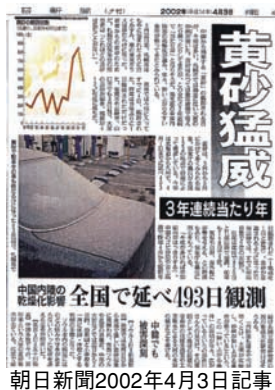
黄砂は年間を通して日本列島に飛来していますが、特に2月から増加を始め、4月にピークを迎えます。日本全国の85ヶ所の気象観測所における黄砂観測によると、左図のように1980年代後半までは年間のべ300日を超えることはほとんどありませんでしたが、1988年以降は頻繁に300日を超えており、2000年以降は2003年を除き、特に多くなっています。

黄砂がもたらす被害

黄砂問題は、北東アジア地域の共通した課題ですが、発生源からの距離によって、その被害の内容・程度は異なります。



黄砂の社会問題化



2002年3月には、それまで黄砂がほとんど観測されなかった札幌にまで黄砂が飛来し、大きく報道されました。このため、国民の関心が高まり国会でも議論がなされました。このような状況を受け黄砂関係の国内省庁間の連絡調整を目的に、2005年2月に黄砂対策に関する関係省庁連絡会議が設置され、各種施策の連携を図っています。

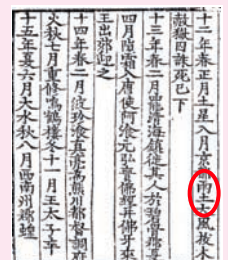
コラム 1

黄砂の歴史記録 「塵雨」「雨土」「紅雪」

黄砂現象は太古から春先に多く見られる気象現象の一つであり、また自然災害であることはよく知られておりました。紀元前1150年頃には、すでに中国の歴史書の中に「塵雨」という言葉が記載されています。

韓国の古文書では、新羅アダラ王時代の紀元174年に「雨土」に関する記述が見られて以降、しばしば黄砂現象と思われる記述が表れます。(右図参照)

日本でも古くから黄砂現象が認められており、江戸時代に編纂された「本朝年代記」には文明9年(1477年)に北国で「紅雪」が降ったとの観測記録が残されています。



韓国統一新羅時代(850年)の「雨土」の記録